

研究主題 道徳授業において児童が思考を深める言語活動に関する一考察 ～書く活動の分析を中心として～

要約：道徳の「教科化」は、「考え、議論する道徳」へと質的転換を図るものとされる。この質的転換を、主体的に道徳性を養うという道徳教育の特質へ立ち返ることと捉え、「児童が思考する姿」を想定し、その姿を見取る評価と指導方法を検討する。検討の結果として、客観的な授業評価に基づくカリキュラムの改善，中心発問の吟味による多様な思考の可能性を指摘する。

キーワード：道徳授業 思考 言語活動 指導と評価 学習者中心

I はじめに

見通すことのできない未来社会を生きる子ども達に、今、どんな力を育むのか。資質・能力の重視は、それを模索する動きだと考えられる。

平成26年「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」（以後、「育成すべき資質・能力—論点整理」と略す）は、資質・能力を踏まえて各教科等の目標、内容を改善することを提言した。

しかし、平成27年の「小学校学習指導要領」改訂によって「教科化」された「特別の教科 道徳」（以後、道徳科と略す）では、育成すべき資質・能力と目標との関連が定かではない。

一方、同年の「小学校学習指導要領解説編 特別の教科 道徳」（以後、新小学校解説書と略す）では「考え、議論する道徳」への質的転換を図るとして、平成26年の「道徳に係る教育課程の改善等について」答申を引用し、価値観の教え込みは「道徳教育が目指す方向の対極」だと述べる。

ただ、翌年の「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について」（以後、「道徳科の指導方法・評価について」と略す）では、指導方法の例示や、評価の基本方針に、大きな転換はなかった。

つまり、「考え、議論する道徳」への質的転換とは、道徳教育の基本的な考え方を引き継ぎ、指導者が教え込むことなく、児童が主体的に道徳性を養うという道徳教育の特質に立ち返り、「考え、議論する」ことを促しているのではないか。道徳授業で児童が思考を深める姿を具体化すれば、道徳科で育成すべき資質・能力と目標との関連の糸口があるのではないかと考えた。

そこで、未来がどのような社会であっても、よりよく生きるための力を児童が主体的に育み続けることを願い、道徳授業で思考を深める児童の姿、その姿を見取る評価、その姿を目指した指導方法について検討することとしたい。

II 目的と方法

まず、児童が思考を深める姿を具体化し、道徳科で育成すべき資質・能力と道徳科の目標との関連を探るために、新小学校解説書等の文科省告示を中心に調査する。また、「姿」を見取る評価と「姿」を目指した指導方法を具体化するため、言

語活動に焦点を合わせ、新小学校解説書、道徳性発達理論、教育理論を調査する。

次に、児童が思考を深める言語活動について、具体的な指導方法と評価を検討するため、道徳授業実践モデルを作成して、授業を実践する。指導方法、評価を中心に検討し、児童の思考を深める道徳授業について示唆を得たい。

III 文献調査

（1）道徳科の目標と、児童が思考を深める姿

道徳科の目標を小学校学習指導要領から記す。

「第1章総則の第1の2に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」こと。

道徳性を養うための学習が3つ明示されている。

- ・道徳的諸価値について理解する学習
 - ・物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深める学習
 - ・自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める学習
- 一方、新小学校解説書に、道徳科における主な言語活動が、2つ示されている。
- ・多様な考え方や感じ方に接することができる話し合い活動
 - ・考えを整理し、体験や状況を想起することができる書く活動

これらから、道徳授業における言語活動A・Bと児童の姿A・Bを想定した。さらに、姿A・Bを児童が自己評価する姿Cを想定した。

（姿A）

中心発問に関する主に話し合い活動（言語活動A）において、道徳的価値について、主体的に、資料の内容を理解して自分の思考・判断を書き、自分と友達の思考・判断を多面的・多角的に思考・判断しながら話し合う姿

（姿B）

道徳的価値の自覚に関する主に書く活動（言語活動B）において、道徳的価値について、主体的に、思考・判断したことを基に、授業前・授業後の自分の行為について思考・判断して書く姿

(姿C)

道徳授業における話し合い活動・書く活動について、自分から行ったか、自分で見通しをもったり選択したりして行ったか、思考・判断して書く姿

(2) 道徳科で育成すべき資質・能力と、目標

道徳科で育成すべき資質・能力は、「道徳科の資質・能力等について」で以下の通り整理された。

- ・「道徳的諸価値についての理解」としての知識・技能
- ・「物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める」思考力・判断力・表現力
- ・「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ため、「自己を見つめ」「自己の生き方についての考えを深める」学びに向かう力・人間性等

これらは、道徳科の目標に明示された3つの学習活動と対応している。つまり、資質・能力を育成する学習を通して、道徳科の目標である道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度が養われると考えることができる。

(3) 道徳授業における「思考」と、学習活動

OECDのコンピテンシーや、平成24年に国立教育政策研究所が提案した「21世紀型能力」における「思考力」の内容から、本論文では、「思考」とは、「知識・技能を単に活用させるだけでなく、自律的に人間関係や社会をつくるという実践へ向かって活用させる営み」であると捉えた。

道徳授業における思考は、道徳的価値について、自己中心の視点だけでなく、他者の視点、集団の視点等を行き来することで深まると考える。

つまり、物事を多面的・多角的に思考し話し合う言語活動Aと、自己を見つめて思考し書く言語活動Bを行うことで、児童は自己の生き方について思考を深めるのではないかと考えている。

(4) 児童評価と授業評価

道徳科の評価について、「道徳科の指導方法・評価等について」では、児童にとって「自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくもの」であり、教師にとって「目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料」であるとする。つまり、道徳授業の評価には、児童評価と授業評価の2側面がある。

(5) 評価の観点と方法

評価の観点について、「道徳科の指導方法・評価等について」では、以下の点を重視する。

- ・より多面的・多角的な見方へと発展しているか
- ・道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか
- ・学習における児童生徒の具体的な取組状況

これらの点をまとまりの中で見取るとする。しかし、児童の思考の発展や深まりを見取るためには、ある時点における状況を見取る必要がある。本論文では、上記の評価の観点を基に、姿A・B・Cに対応する見取りA・B・Cを設定し、1時間の道徳授業でも用いて、見取りの妥当性を検討す

る。なお、見取りCは、実際には児童と指導者が相談して決定することを考えている。

(見取りA)

- ① 道徳的価値について、中学年以上では、自分の立場だけでなく、他者や集団とのかかわりから思考・判断しているか。(道徳的価値の理解)
- ② 道徳的諸価値の内容を発言・記述するだけでなく、道徳的価値の重要性や、道徳的行為をしたときの達成感を発言・記述しているか。(自己を見つめる)
- ③ 話し合い活動で友達が発言した思考・判断を基に、再び思考・判断をしているか。(多面的・多角的な見方)

(見取りB)

- ① 道徳的価値や行為について、今までの自分の生活経験を振り返って思考・判断しているか。(道徳的価値の理解)
- ② 道徳的価値や行為について、経験した内容を記述するだけでなく、道徳的価値の重要性や、道徳的行為をしたときの達成感が記述されているか。(自己を見つめる)
- ③ 道徳的行為の実践について、今後の自分の生活を想起して思考・判断したり、実践意欲にふれたりして記述しているか。(多面的・多角的な見方、自己の生き方)

(見取りC)

- ① 言語活動A・Bにおいて、道徳的価値について、自分から、考えを話そうとして挙手したり、書いたりしたか、思考・判断している。
- ② 言語活動Aにおいて、道徳的価値について、資料に関心をもったか、友達の考えを最後まで聞いたか、思考・判断している。
- ③ 言語活動Bにおいて、どんな道徳的価値を学んだか、学んだことを生活に生かそうとしているか、思考・判断している。
- ④ 言語活動Aにおいて、道徳的価値について、話し合いたい話題を自分から見つけようとしたか、思考・判断している。

評価の方法について、新小学校解説書は、「記述式」「大きくくりなまとまり」「個人内評価」等、児童評価の方針を示すが、授業評価について明らかにしていない。

本論文では、児童評価を基に授業評価を行う。授業評価の客観性を向上させるため、評価の観点・方法を設定したうえで指導方法を構想することを基本とする。道徳性発達理論からは児童の相互性や視点取得能力の発達の知見を参考にする。

(6) 指導方法の工夫

児童が他者や集団の視点から思考を深めるため、目的と相手を意識した言語活動A(話し合い活動)に参加するように、2つの工夫を行う。

1つは、資料提示の工夫である。例えば、読み物資料の登場人物の心情理解が難しい場合に、登場人物の表情、行動、状況を場面絵や文字カードで提示したり、動画資料を用いたりする。

2つは、発問の工夫である。白木(2016)のアクティブ・モラル・ラーニングの考え方を取り入れ、児童の発達段階に応じた思考発問を設定し、多様に思考できる中心発問を吟味する。

さらに、言語活動A・Bを通して、主体的に学ぶ工夫と、学習活動に充実感・達成感を得る工夫を行う。

主体的に学ぶ工夫は、秋田(2015)の「自分で見通しをもち選択できる学習の機会」をつくる。児童が資料の感想を自由に話したり、授業の話題を

提案したりする「児童の自己決定」を取り入れる。学習活動に充実感・達成感を得る工夫は、指導者が児童の発言や記述に表れた思考を認め励ますことや、他の児童に広めることを考えている。

(授業づくりの工夫)	
a	道徳的価値について、児童が理解しやすい資料提示の工夫
b	道徳授業において、児童が主体的に学ぶ工夫
c	道徳的価値について、児童が思考し話し合う発問の工夫
d	道徳授業において、児童が自分の思考・判断や行為を書き話すことに充実感や達成感を得る工夫

(7) 道徳授業実践モデルが示す仮説

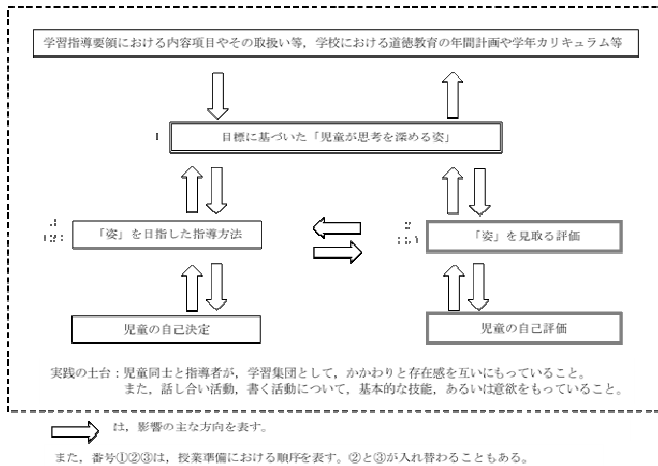


図1 道徳授業実践モデル

道徳授業実践モデル(図1)は、次の仮定を示す。すなわち、児童と指導者が実践の土台に立ち、学習指導要領や学年カリキュラム等に基づき、指導者が、

- ①「児童が思考を深める姿」に向かって、
- ②「姿」を見取る評価を決定し、
- ③「姿」を目指した指導方法を工夫して、授業で児童に自己決定を促すならば、

児童は「思考を深める姿」を表出し、指導者は「姿」を見取り、児童は「姿」を自己評価できる。指導者は、学年カリキュラムを改善し、学習指導要領の内容項目について理解を深めることができる。

IV 研究①(5年生を対象とする研究授業)

資料提示の工夫について、実話・動画資料の有効性を検討する。また、授業評価について、観点を基に授業記録や児童の記述から見取る方法の妥当性を検討する(詳細は省略)。

検討の結果、実話・動画資料の提示は、授業の導入部分で児童の関心を高め、道徳的価値への気付きを生むと考えられる。言語活動Aで、気付きをもとに、児童が思考を話す姿があった。

評価方法については、授業記録と児童の記述を組み合わせることで妥当性を向上させる可能性がある。ただ、客観的な評価の観点を設定することは難しい。

V 研究②(6年生を対象とする研究授業)

まず、授業評価について、松原(2010)の「自己組織化マップ」の利点を検討する。次に、白木

(2016)の思考発問の有効な用い方を検討する(省略)。

(1) 学習指導案の概要

日時 平成27年12月17日(木)
2時間目6年Y組, 4時間目6年Z組

場所 金沢市立E小学校4階教室

指導者 担任(T2)と、研究者(T1)

主題名 これからも、友達と支え合って
B(10)友情・信頼

資料名 「あやちゃんの卒業式」出典:NHK for school『道徳ドキュメント』

ねらい 友達と思いや考えを受けとめ合い、支え合うよさに気付き、進学後も、友達と人間関係を築いていこうとする実践的意欲と態度を養う。

展開 Y組の中心発問:青山君は、あやちゃんをどうして忘れなかったのだと思いますか(主人公の視点で考える)
Z組の中心発問:あやちゃんと青山君、2人はどんな友達だったのでしょうか(第三者の視点で考える)

(2) 自己組織化マップ作成ソフト(MSOM)

松原(2010)によるテキストマイニング・ソフトで、「単語の出現頻度」と「単語間の関連」を表す概念地図を作成する。学級全員の記述を入力し、出現頻度の高い単語を中心としたまとまりを見取ることができれば、単語の意味から、児童の思考・判断の概要を推定することができる。

(3) 言語活動Bに関する授業評価

言語活動B、すなわち、「以前・今・未来の自分を思い浮かべ、友達とのつながりについて考えたこと」の記述をY組(図2)、Z組(図3)で比べる。Z組の語彙は、Y組に比べ、59%多い。Y組は、頻出語が占める部分が大きい、Z組は、頻出語が占める部分と、頻出語の周りに非頻出語が見られる部分が地図を二分している。

Z組の地図をより詳細に分析すると(図4)単語群a~hが析出され、単語の意味から、「道徳的価値の理解」「自己を見つめる」「自己の生き方」等の思考があったと推定された。

(4) MSOMを用いた評価方法の利点

利点の1つは、複数の思考の関連を推定できる点、2つは、児童が個別の経験を語った場合に、それと関連のある頻出語が推定できる点である。

Z組の地図では、児童が「自己を見つめる」思考と、「青山君」との関連が推定された。

VI 考察とまとめ

授業評価では、自己組織化マップによる評価方法と、児童の発言や記述を用いた児童評価を組み合わせることによって、客観性・信頼性が向上し、カリキュラム改善へと進む可能性がある。

指導方法の工夫については、実話・動画資料は児童の関心を高め、言語活動Aで児童が思考を話す姿につながる可能性がある。また、児童の発達段階を考慮し、中心発問の視点を吟味すると、言語活動Aにおける語彙が増える可能性がある。

Ⅶ 終わりにかえて 研究③（４年生とつくる実践の計画）

姿Cを見取る評価（児童の自己評価）と、姿Cを目指した指導方法を、1年間実践する計画だが、現在はその途中である。

「主体的に学ぶ工夫」では、4月の授業開きに児童が学び方等を話し合い、1学期中は、毎時、振り返りをした。2学期は、授業で児童が「考えたいところ」を提案したり、学期末に振り返りをしたりした。

「学習活動に充実感・達成感を得る工夫」では、指導者が、児童が記述したノートに返信を書いて児童の思考を認め励ましている。さらに、それを道徳便りに掲載して配付し、児童の思考のよさを広めるとともに、他の教師や家庭との連携を図っている。

今後も、道徳授業実践モデルを部分的に検討する研究を継続し、児童同士、児童と教師がかかわり合い、他の教師や家庭、地域と連携しながら、よりよく生きる力を児童が主体的に育む授業づくりを児童と共に進めていきたい。

参考文献

- 『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について』文科省、2016
- 『小学校学習指導要領』文科省、2015
- 『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』文科省、2015
- 『育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—』文科省、2014
- 有光興記・藤澤文『モラルの心理学』北大路書房、2015
- ノーマン・ブル著、森岡卓也訳『子どもの発達段階と道徳教育』、明治図書、1977 邦訳
- ユルゲン・ハーバマス著、三島憲一他訳『道徳意識とコミュニケーション行為』岩波書店、1991年邦訳
- 佐野安仁・吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』、世界思想社、1993
- 秋田喜代美・坂本篤史『心理学入門コース3 学校教育と学習の心理学』岩波書店、2015
- 佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』（岩波ブックレット No.524）、岩波書店、2000
- 佐伯胖『子どもと教育を考える3「わかる」ということの意味—学ぶ意欲の発見—』、岩波書店、1983
- 松下佳代『ディープ・アクティブラーニング』、勁草書房、2015
- 白木みどり「考える道徳、議論する道徳 アクティブ・モラル・ラーニングの授業づくり小学校」、明治図書、2016
- 松原道男「自己組織化マップを用いた理科授業分析法の開発」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 2:37-43』2010
- 西岡加名恵「ウィギンズとマクタイによる『逆向き論の意義と課題』」『カリキュラム研究』第14号、日本カリキュラム学会、2005

Y組

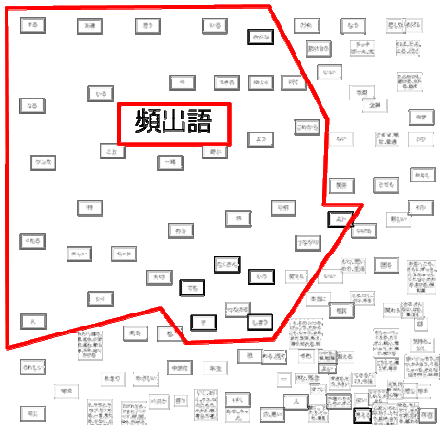


図2 言語活動BにおけるY組の地図

Z組

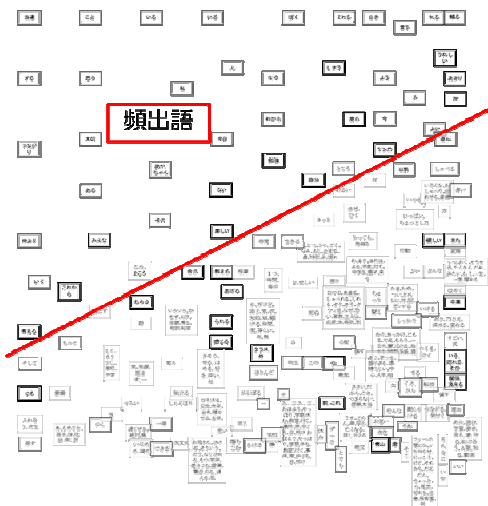
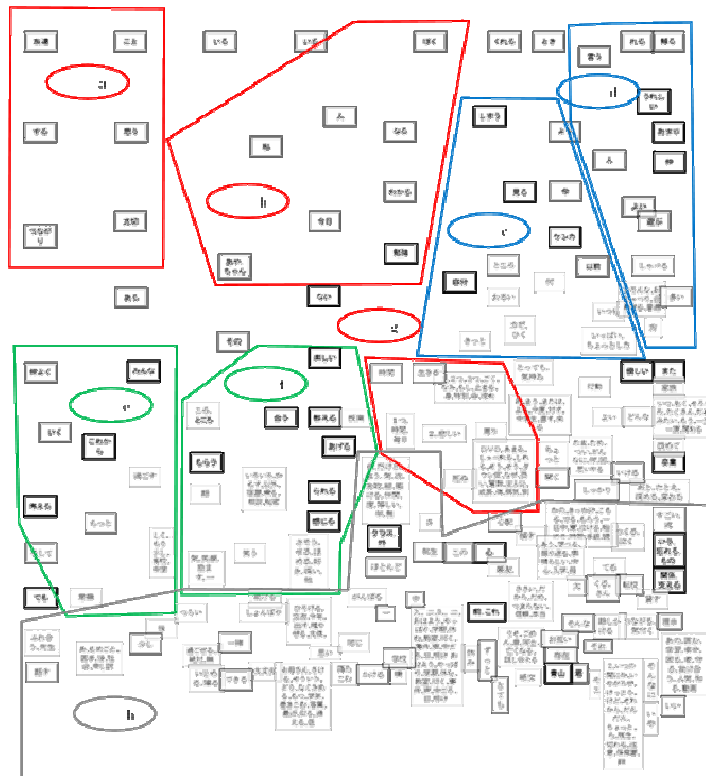


図3 言語活動BにおけるZ組の地図①

2組「以前や今の自分をふり返ったり、未来の自分を思い浮かべたりしながら、友達とのつながりについて、今日考えたことを書いてみよう。」



単語群a 友達、こと、大切、する、怒つ

単語群b ぼく、私、人、なる、今日、あやちやん、勉強、わかる

単語群c 自分、以前、いつち、いつばい、ちよつとした、ケンカ、今、見る、よう

単語群d 帰る、れる、うれしい、あまり、仲、よい、人、遊ぶ、しゃべる、多い、合はせる

単語群e これから、みんな、仲よく、いく、もつと、考える、豆蔵

単語群f 楽しい、教える、合う、あける、られる

単語群h おれる、関係、支える、泣く、転転、高山君、お互い、話し合える、存在、絶交、いやがらせ、学校、罵、いじめる、もめごと

単語群g 生きる、時間、命、時間、悲しい、死ぬ

図4 言語活動BにおけるZ組の地図②